

卷之二

第貳

157

107



紀元二千五百九十年版

第貳

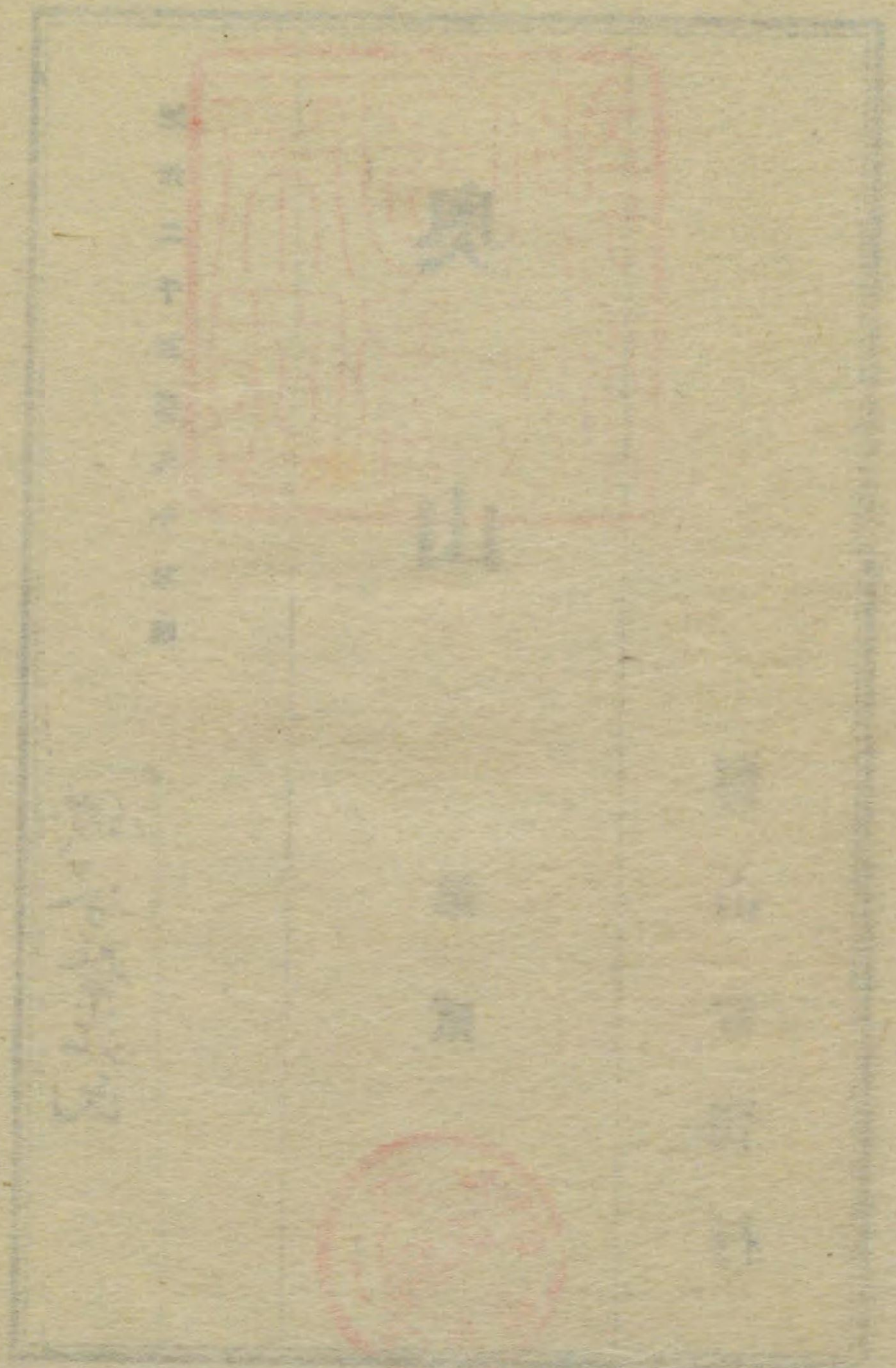
磯谷紫江氏



奧山會刊行



哥麻呂筆





新吉原角町・松葉屋内粧ひ・香蝶樓國貞畫





華兒

〇





奥山會記

四月十九日晴天、午後六時例により今井爽邦壽伯の先著を初め総勢十九人。急御差支とあつて缺席御通知の方五人。座席定つて辨天山の七時の鐘のうなる時吉例の秀子天大しづと東叡山の麓より紫の雲を踏みしだき、菩薩乗を持しての來迎。紅衿の小優婆夷手ばしこく配膳の役を承り、一座の下戸達への授戒には

甘露法門の醍醐味とあつて、蕎麥眞如隨緣起の善哉汁粉。上戸達への授戒には二河白鳥の徳利に摩訶般若湯を湛へ、弘誓の船の盃になみく。百味飲食の魁は鐵火味噌の須彌山。二本目の八功德水。尻焼は焦熱地獄、酔心地は極樂淨土。さて次の御趣向は、左黨右黨の首を傾げる茶碗そば。汁はのみ介の咽喉を鳴らせ、麩はくひしん坊の舌鼓を打たしめる無上の風味。これなん上下両院の賛成を餘儀なくさせる公案なり。其次には特製太打そば。此のそば特別の賓客ならでは提供せ

ず、开は餘程の通ならずんば眞の風味は解せられずとの託宣なり。次に茶そば。これは世間の普く知るところ、茶人ならずも茶人の心持になつて喫する茶氣滿もの。其次が名代の笹そば。これぞ一枚看板の名物、御得心のゆくまで幾枚にても召上れとの清規なりさてそばのかすく出るほどに啜るほどに、波羅密多般若湯の微醺は發して善巧方便の諧謔雲の如く會心のうつぼ猿を一曲而も鮮かに演奏されました。陽氣の熱はいよく昂つて、御定連の燃えつくやうな廣長舌相、座談に雄辯の花を咲かせ、トド前回の約束をと促された大野翠柳氏が簡短に一席驛辨の話。一口に驛辨の話といへば、附き物



起り、拍手喝采の鯨波雷の如く響いて、氣も魂も虚空遙に兜率天にうろつく頃、常磐津松壽太夫三絃栗毛の駒に鞭打つて

の土瓶の茶話くらゐに思つて居ると大違ひ、驛辨の歴史には千様萬態の沿革がある。高崎のへぎ包を紐で結んだ島田鮎や、掛紙の意匠にシグナルの腕木を描いてスリ御用心だの懐中物御用心だのと警告をしたのなどの實録ぶり。いづれも二三十年前赤帽二錢時代の夢のやうな回顧譚で、そのくせ翠柳氏はまだ紅顔の美少年であつた。それが老大家も及ばぬ特殊のコもので席上を斡旋、漫偏なく愛嬌を振撒いては感激の丹心を披瀝して居ました。



趣味談を絲の如く連續的に引出すのだから、甚だ面白く愉快に聽えた。萬盛庵の女主人園子さんも始終ニコニ

○ 當日御出席の面々は、

伊藤忍忍洞	磯ヶ谷紫江	今井爽邦	池田弦夫
畑田九汀	星野半春	本多冬城	角田保
高野榮二	高岸拓川	筑井江畔	辻直
大野翠柳	矢崎義郎	松永進	小林六郎
篠崎四郎	叔山柑子	鈴木一踞	(オロハ懸)

當日特別寄贈品を送られたのは、

- 一、日本一の松並木手拭
  - 一、江戸の櫻狂歌抄
  - 一、橋を一切渡らずに芝口より淺草観音に詣る道順記刷物
- 鈴木潤三氏  
江戸文學同好會  
磯ヶ谷紫江

以上御出席の諸君へ漏れなく呈上。

○  
今回から趣向を更へて御出席の諸君に一品づ、御持寄を願ひ、それを抽籤にて

御銘々へ呈上する事にいたしました。尤も思ひくゝの持寄もオツですが、一ツ人困らせの首ひねらせも御愛敬と、毛の數足らぬ猿智慧を搾り追々と難題を提出する事にして、まづ最初は小手しらべ、手柔なところで一は花一は狐といふ二題を課し、御随意に御撰擇の上一品一個御持寄を願ひました。

御持寄の品類並に御寄贈者

- 一、狐の手袋(ヂキタリス) 一包 伊藤忍忍洞
- 一、小櫻家の小まんぢう 一包 同上
- 一、口入稻荷の御腹籠 一櫃 鈴木一踞
- 一、江戸の花(煎餅) 一袋 高岸拓川
- 一、花の花(香水線香) 一組 同上
- 一、王子の狐(御自製御趣向物) 三本 筑井江畔
- 一、極彩色花の畫色紙 一枚 今井爽邦
- 一、鯖稻荷の繪馬 一枚 大野翠柳



- 一、さくら紙。花かんざし附
  - 一、道成寺模様手拭
  - 一、王子の狐。御守札とも
  - 一、櫻の花漬と寶珠の玉
  - 一、花競祝儀袋
- |      |      |      |      |       |
|------|------|------|------|-------|
| 四疊半  | 小包   | 一體   | 一組   | 十組    |
| 小林六郎 | 本多冬城 | 星野半春 | 矢崎義郎 | 磯ヶ谷紫江 |

以上の品々を御出席者の頭數に割當て抽籤にて呈上しました。

こんな事に、決してヒケを取らぬ高野金太郎氏は、當日出席の通知が来て居たところ、俄に御支障があつて缺席せられました。いづれ次回あたりで席上に花を咲かせられることとせう。

十一時前後、機嫌よく散會。

### 奥山會記

五月十八日は淺草三社祭の日に當り、境内は雜鬧を極むべく、萬盛庵の人出入も頻繁だらうと遠慮して、當月の奥山會は次の金曜日に延期しました。

五月二十三日(第四金曜日)晴天、此日午後六時の前後、光臨の會員諸氏を著到順に掲げますと、

- |       |      |       |      |
|-------|------|-------|------|
| 磯ヶ谷紫江 | 高岸拓川 | 鈴木一蹠  | 寺崎廣載 |
| 宮尾しげな | 星野幸雄 | 伊藤忍忍洞 | 今井爽邦 |
| 畑田九江  | 本多冬城 | 久永辨次郎 | 小林六郎 |
| 高野榮二  | 池田茲夫 | 中山孤村  | 榎山柑子 |
| 矢崎義郎  |      |       |      |

以上十七人、我が會としては申分なしの御人數でした。萬盛庵の接待係も例の通り園子女將と秀子夫人、合歡と杜若の淡粧幽婉は、牡丹芍薬とも觀つべき紅袴

嬢の濃抹艶冶と打交つて一座時ならぬ花園とぞなりける。織手に捧げ来る輕甌には龍團の乳花を浮べ、點心の蕎麥搔善哉は先づ蕉葉黨に感歎の唾を吞込ませる。配膳の上には白鳥と瓷杯と鶴龜の姿して味噌盛の蓬萊洲に舞ひ遊ぶこれも吉例に洩れず。前菜のいたわさ、に映する頃、今宵はあれこれと蕎麥の撰擇をヌキにして―手敷を省くと言つては濟まないが―粹の徹つた茶碗蕎麥、蓋を取れば筆の軸ほどな眞竹の笋に打返し蒲鉾、青柚子の皮に南薫の香を持たせ、汗澤山の麩少量、これを左利きを頗る喜ばせた。蕎麥好きには後からく〜と出る笹蕎麥が目的だ。いづれも肚の納得するまで詰込むだ折しも、今日課題の魚と三角の物との持寄品が披露された。



山葵は静岡縣の本場物、蒲鉾も因みの駿河屋製にて風味殊に勝れたり。盃の數重なりて臉紅ホノリと燈光

鉢、青柚子の皮に南薫の香を持たせ、汗澤山の麩少量、これを左利きを頗る喜ばせた。蕎麥好きには後からく〜と出る笹蕎麥が目的だ。いづれも肚の納得するまで詰込むだ折しも、今日課題の魚と三角の物との持寄品が披露された。

當日御持寄品目并に御寄附者

- 一、今戸焼鯛。三十尾 磯ヶ谷紫江
- 二、支那製木魚(函蓄付) 高岸拓川
- 三、根岸の三角ちまき 同上
- 四、讃岐産、鯛持人形 鈴木一踞
- 五、珍味磯の華(壇入) 寺崎廣載
- 六、鱗形薄荷糖 宮尾しげな



七、且過寮の三角物(生揚)

八、魚きん御手ふき

九、浮人形緋鯉

十、黒鯛釣道具、てんびん

十一、三角枝折、七枚

十二、銅製三角灰吹壺

十三、富士末廣、一對

十四、大流船(魚形の菓子を盛る)一棧

十五、三角薄荷糖

十六、鯛抱き人形小丸額

十七、鱗形手拭

十八、魚河岸手拭

十九、三角口、お芝居香水

二十、火打形、掛香

伊藤忍忍洞

星野幸雄

今井爽邦

畑田九江

本多冬城

久永辨次郎

小林六郎

高野榮二

池田弦一

中山蕪村

平野圓子

關口秀子

矢崎義郎

同上

いづれも氣取つた物でした。これを抽籤にて分配することにし、御自分の品が御自分に當つたのなどは代品を差上げ、剩餘の物はジャンケンにて即座に其の歸屬を決定しまして、御銘々の御膝下へ呈する。主として軽い物ばかりでしたが、中に少々重くるしくて御持歸りに御迷惑と恐察した品もありました。これは將來寄贈者の方で加減して頂きたいものです。また氣の利いた物ばかりとは參らず、いささか利かないと思召す物がありましたにしても、そこに趣味もあり可笑味もありませんので、孰れ劣らぬ御配慮の結晶に差別なく、日頃の御嗜みが嬉しいと、今更感涙を禁めかねた御趣向もあり、前回に遜らぬ御熱心を感謝します。尙將來も御加勢の程を願つて置きます。

糀山柑子氏、今夕持寄を懈怠した御訛言とあつて、三角盡しの卓説を講演されました。當意即妙の圓轉洒脱な妙舌には一同陶然として聽惚れました。其他數氏の漫談冗談續出し、柑子氏揮毫『自笑自戒』の扇面、今井宮尾両先生合作の扇面な

ど引張蛸となつて所有權の確定した末、一同床の前に名作の御面を持寄つてパチンと撮りました。先度はグルリと車座になつて三面撮つて失敗、今夜は萬全を謀つての一面取り。ア、神よ、願はくは無事に寫さしめたまへ。

松永進氏は急に差支があつて缺席されました。追々お暑くなりますので餘興の計畫も差控へました。少し涼風が立つてからまた寄興を願ふ心算でございます。和氣洋々、楽しい時刻は早くも移つて、十時半には御遠方の御方からぼつ／＼御歸還、十一時頃にはめでたく散會となりました。

五・五・二五・記

## 東西東西

さて突然ながら御一同様へ御披露申し上げます。本會の會場萬盛庵も久しく奥山の一角に光つて居りまして、御評判も高砂の『高き名や、此の奥山に見世開けて、

名代ざるそば仕出しては、遠く近くの御最良で、はや數十年となりにけり。』と謠はるゝ老舗でありました。觀音様の公孫樹とは尉と姥のかたらひをして居ましたところが、震災といふ厄介物のために、淺草寺寺院の新築用地には差當り此處を一の谷と目指され、馬上の熊谷もどきに軍扇を翳して、返せ／＼と言はれまするからには、素より地借の悲しさ、敦盛のあつかましく駒のかしらを返さぬ譯には參りません。いさごち三段ばかり後退りして、乗掛の馬道七丁目、目盛りも四角な五番地の角櫓へ楯籠ることに決定いたしました。その引越のドサクサのあふりを吃つて本會も六月は俄に休會と致しました。芽生えて間もない嫩軍記、藤の方の不時の出來事、さかみづいたる醉倒れが、宗清の外胸を衝いた苦しまざれ、いろ／＼思案して彌陀六な考へも出ぬ結果でございます。いづれ七月早々には次會開催の御案内を差上げる筈、よしなに御勘辨下さりませう。

五・六・一七・記

奥山俳句

紅臭く遊ぶ揚弓や夏の夜	三村舟江
風鈴や魔風戀風のぞき窓	武田昌美
深緑やどん底を喘ぐ人々	本郷梅柳
爛れては肉の香に飽き酒曇き	磯ヶ谷紫江
夏虫や仲見世ゆけて赤い灯に	
よし原は遠し六區の夏の灯に	
つばくらめどこをとんでも同じ軒	
ただれゆくみのゆくすへや秋近し	



## 遊女粧よめぼひ、こと菫雲女史の繪姿

淺草公園三社裏に在る人麻呂神詠碑の筆者菫雲女史の事は、三月の奥山會會報人麻呂忌の末に記載して置いたが、今回本誌に

歌謠、長喜、國貞。

の筆に成る錦繪を挿入するよすがに、雅俗文庫「編輯」から、小泉迂外君の「抱一と菫雲女」の一文を拜借し、所謂錦上の花として差添へ劉覽に供する。

### 抱一と菫雲女

文化の頃角町松葉屋半藏の抱妓に粧太夫といふ評判の花魁があつた。遊藝百般に通じた外四角な漢字にも暗くないので、龜田鵬齋が大層寵愛して菫雲女史の號を與へた。僕の親分抱一上人が名高い。

傾城の服紗さげきや大晦日

の句は、文化十年の除夜に此女の部屋での即興である。

此女には抱一も鵬齋老に秘竊で一寸關係したらしく、或時上人が鶴屋の遊女大淀の許へ知己と共に遊びに往つたのを、譯あつての事かと嫉妬して、

きのふけふ淀の濁りや五月雨

と、上人の許まで厭味を並べたので、流石の上人もこれには辟易して、

淀裡のまだ味知らず五月雨

と返事を書かれた。するといつしかこれを大淀が聞いて、

濡衣を着る身はつらし五月雨

と詠んで又粧が許へ送つたといふ話がある。

知十氏の談に、此女の被布の裏は紫羽二重で、金泥で抱一が梅花を描き、鵬齋が賛を書いた逸品であるとの事だ。

文化十五年身受されて廓を出る時、抱一は、

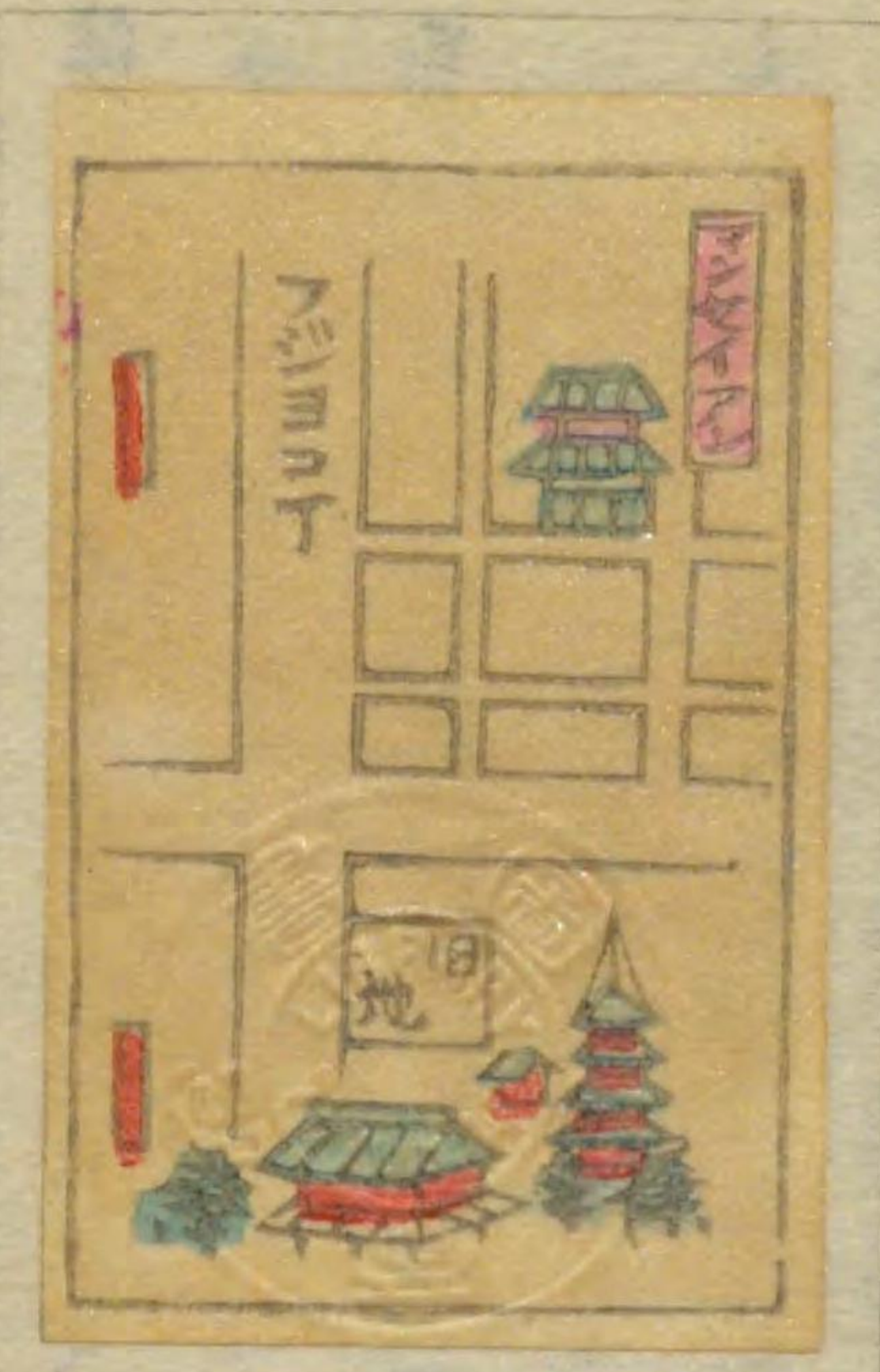
菜の花をまき散しゆく門邊哉

と餞けた。何人に根曳されたか、其處までは解らないが、文政元年師走の抱一が  
旬日記に、

兩國横山町葦雲女史に年の柳を送る

來る年を縮める年の柳かな

とあるより考へれば、その旦那は大商賈の御隠居らしく想像される。



萬盛庵燐票(其二)

堀越秀(九世、市川團十郎。明治三十六年九月十三日没)「暫」銅像銘

—東京市淺草、觀音堂境内東位—

堀越秀像銘并序

市川團十郎

大正戊午九月銅鑄堀越秀演技像成堀越氏者倡優名閱世稱市川團十郎秀  
其七世第五子天保戊戌十月十三日生於江戸木挽街弱冠呂技名天下明治  
甲戌七月襲稱曰九世團十郎癸卯九月十三日病歿茅碕別業享年六十有六  
事具伊原敏郎撰傳中秀壯遭中興之運目睹庶事維新心有所期誓欲脫倡優  
之陋習□是繩已謹廉遂能爲士林所齒豈可不謂卓於往而赫於來者邪像之

成在秀即世十五年後其嗣福三郎請陶庵西園寺侯書既跌前又囑余銘余嘗與秀相識喜  
其爲人且謂倡優之技雖卑□有關於教化也乃爲之銘曰

優孟九世傳衣冠名噪天下十郎團睥目隆準顏塗丹矮軀亦作長身看其止端重邱山安其

動盪迅鵬鷲搏音吐旬ニ扣金盤一呼堪息百夫謹奄忽□妙技殫海□秋陰蓋柏棺惟見遺像立□于千載兒女增永歎

鷗外森林太郎撰

不折中村鉦太郎書

建設者追善會委員

門下一同  
臺石後面  
銅版陽鐫

名優、團十郎ノ扮裝「暫」ノ銅像ノ前ヲ過アルゴトニ、佩刀ノ柄が、モギトラレテ、ソノマ、ニナツテイルノヲ、物足ラナクガモウ。

### 小金(千葉縣東葛飾郡、常磐線)妙延寺ノ鐘銘

一東京市淺草、小島町、小島小學校東傍  
線香ノ絶エメ、觀世音石像ノソキニオカレアル

奉唱滿首題壹万部

如我昔所願 今者已滿足

化一切衆生 皆令入佛道

天長地久 國土安全

一天四海 皆歸妙法

信力增進 道念堅固

自他俱安 同歸常寂

昔

寶永三歲在己戌十一月六寅

御鑄物師

奥田出羽守源長廣作

下總國相馬郡小金領内大井村長國山妙延寺南面  
陽鐫



南無妙法蓮華經

常住院 日達(花押)北面

(願主大井村石原半右衛門、其他人名等彫レド、略ス。)

淺草小島町、小島小學校の傍を通ることに、雨屋の観音サマの石像にいつも香煙が立のぼるのを見る。そうして、梵鐘が一つ、處狭い雨屋の隅におかれてあるので、多分は震災で焼けたお寺が、そこにあつた観音サマの假住居でもあろうとおもつてゐた、さもなくば梵鐘は、少し身分不相應に考へられたから。ところが、それは全く見當ちがひであつた。

この観音サマの世帯主は、隣の鈴木？とかいつた、なんでも會津戦争の落士とか、そのころからこの小島町界限に住んでゐるものだとのこと、珍らしいマルメロ(カリンの種類)の太木があつて、そのかけにこの観音サマが年久しくあつたものを世話をしてきた。鐘は、大正七、八年、仲間(古物を扱つた商賈を)の手から入れたもので、危くツブスところを命もらひして、この観音サマに備へたものだ。一方、鐘を賣り拂つたといふ妙延寺は、鐘改めた鐘よりは、賣拂つたツレが入つた鐘の方が、音が優つてゐたと、コボしてゐるといふ聞傳を、世帯主の孫娘らしい子もちが、赤紙線香の仕入込の傍で話してくれた。狭いところにおいた鐘のむき込んで、彫られた文字をやつと知つた。

No. 6

昭和五年八月十三日印刷納本  
昭和五年八月十八日發行

「限定壹百部」

不許復製  
奥山二第

編輯者 磯ヶ谷孝治  
東京府和田堀町和泉二四三

印刷者 宮西次郎  
東京市麹町區三番町六十九番地

發行所 東京市本郷區駒込神明町九〇  
印刷所 東京市麹町區三番町六十九番地  
明元社  
邦文舎



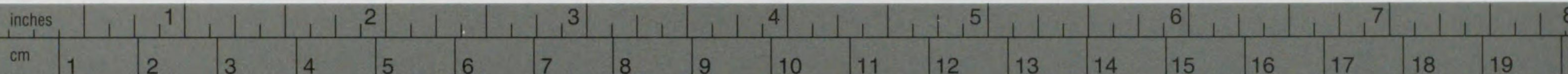


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

